

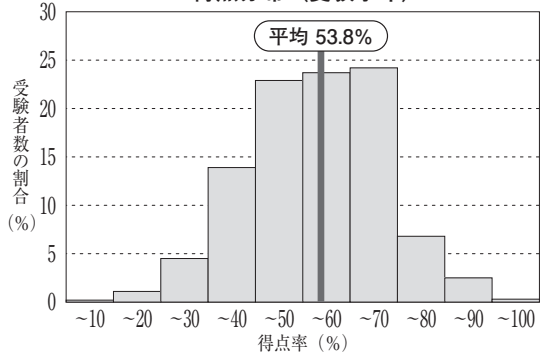
生物基礎

基本的な知識を身につけよう。

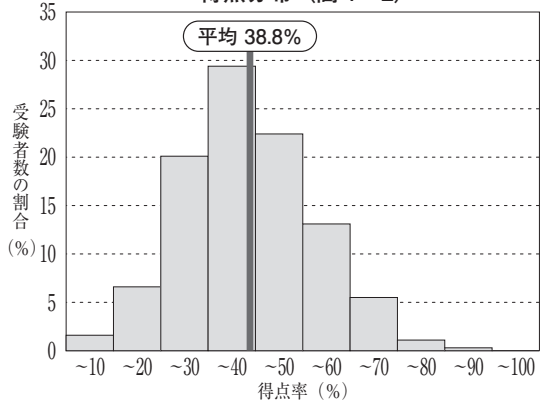
I. 全体講評

今回の全国統一高校生テスト生物基礎の受験学年の平均点は26.9点だった。大問数やマーク数、難易度、大問ごとの出題分野はセンター本試験に準じた形をとり、第1問は生物と遺伝子、第2問は生物の体内環境の維持、第3問は生物の多様性と生態系とした。分野に偏りがないう、教科書全体からまんべんなく出題している。今回の模試で平均に届かなかった大問、また他と比べて得点率の低い大問に重点をおいて、しっかりと復習をしておこう。

得点分布 (受験学年)



得点分布 (高1・2)



II. 大問別分析

■各学年の平均点、大問ごとの得点率

学年	平均点	第1問	第2問	第3問
高1	19.0点	55.0%	34.3%	25.1%
高2	19.8点	54.0%	37.9%	26.9%
受験学年	26.9点	74.9%	50.5%	36.2%
全員	24.6点	68.4%	46.3%	33.2%

第1問 生物と遺伝子

細胞内で行われる代謝および遺伝情報の発現に関する知識を整理しよう。

Aは同化と異化およびそれらに関わる細胞構造に関する基本知識を問う問題で、問1～問3の受験学年の正答率はそれぞれ73.4%、85.7%、93.0%であった(以下の正答率は、すべて受験学年のもので

ある)。Bは遺伝情報発現のしくみに関する問題で、問4～問6の正答率はそれぞれ87.1%、83.3%、34.5%であった。同化と異化の違いや、呼吸の反応に関しては非常によくできていた。塩基の相補性、転写と翻訳に関しては計算問題として出題されることも多いので、もう一度復習しておこう。

第2問 生物の体内環境の維持

体内環境の維持に関わる調節のしくみを正確に理解しよう。

Aは自律神経系と内分泌系に関する問題で、問1～問3の正答率はそれぞれ51.1%、42.6%、35.5%であった。Bは免疫に関する問題で、問4～問6の正答率はそれぞれ55.3%、80.8%、37.6%であった。血糖量調節のしくみは頻出事項なので、自律神経系と内分泌系がどのように関わるかを整理しておこう。

第3問 生物の多様性と生態系

バイオーム、植生の遷移、生態系における物質の循環に関する知識を整理しよう。

Aは生態系における炭素の循環、植生の遷移、バイオームに関する総合的理解をみる問題で、問1～問3の正答率はそれぞれ34.8%、23.3%、37.7%であった。第3問の問2が今回の模試で最も正答率が低かった。食物連鎖について、具体的な生物名とともに改めて確認しておこう。Bはバイオームの特徴と暖かさの指数に関する問題で、問4・問5の正答率はそれぞれ42.2%、42.4%であった。この単元においては、バイオーム、遷移、物質循環等について、常に教科書に出てくる生物名とセットで理解しておくことが大切である。

Ⅲ. 学習アドバイス

◆受験生及び既に受験勉強に励んでいる人へ

平成27年度センター試験から現行過程での入試が始まり、出題範囲は大きく変わったが、基本的な知識問題を中心に実験考察問題、計算問題などが出題される形式はこれからも変わらないと思われる。これまで受験した模試や過去問演習で明らかになった自分の苦手分野を中心に、教科書やテキストを使って知識の抜けや理解不足だった分野を最後まで埋める努力をしよう。1点でも多く得点できるよう、センター試験本番までの限られた時間をバランス良く使ってほしい。

既に受験勉強に取り組んでいる高1・高2の皆さんは、まず教科書の内容についての知識と理解を深めることに重点を置いて学習を進めてほしい。教科書に記載されている実験や、図表・グラフについても内容を理解した上で読み解けるようにしておこ

う。

また、センター試験の形式や文章表現に十分慣れ、練習を積んでおくためにも、しっかりと過去問に取り組んでおくことが得点力アップにつながる。センター試験本番と同じ形式の模試などを積極的に利用してほしい。センター試験本番まで計画的に学習を進めていこう。

◆これから本格的な受験勉強に取り組む人へ

センター試験では、生物基礎のすべての分野からまんべんなく出題され、教科書に記載されている内容は、細かな知識まで幅広く問われる。限られた試験時間を有効に利用するためには、知識のみで解答できる問題はすばやく解答することがポイントになってくる。そのためには、正確な知識をしっかりと身につけること、苦手分野をつくらないことが重要である。教科書の重要な用語（太字部分）に重点を置いて、そのつどきちんと理解しながら学習を進めていってほしい。